

内山先生

明治以前の日本には宗教も信仰も無かった
それは、今のものとは違うものだったからだ

明治以前の伝統的な信仰とは？
人々の思いや願いや祈りだ
人は色々な願いや祈りをする
それがのちに信仰と呼ばれるようになる

思いの中には、極楽往生や成仏などの願いがあった

インドの仏教は、死者を供養する先祖を供養するのではない
しかし日本では、仏教やお寺の中心の仕事が使者の供養
法事なども

そのおかげで、お寺さんは仏教の原理と現状のギャップに悩む

ただ、私自身は構わないと思う
なぜならば、日本の風土に暮らす人々は死者の供養を大切にしてきた
そこに定着したのだから、大事にしてきたらいいじゃないか
仏教もまた、人々の願いや思いが先に会って、その上に日本仏教が成り立ったのだと思う

死者を供養するというと、我々は明治以降の発想になりすぎる
死者の霊や魂は存在していて、存在するから供養するのだ、というのが今の考え
しかし明治より前は逆、供養するから魂や霊があるのだ、ということ

先に関係ありき、が日本の概念だ
先に供養することで、死者とともに生きようとする
死者とともに生きようとするから、死者は存在し、彼らの国があるということになる
供養するから、先祖は存在するのだ
先に死者ありきではない

その思いが共有されて、信仰がある
共同体の信仰というのは、色々な願いを内部に持っている
絶えず、五穀豊穡が祈られる、または村を守る思いなど

そこに、悪霊退散が出てくる、先祖供養が出てくる
そういうものが共同体の中で作られ、信仰される

ところで、先祖って言葉には注意だ
伝統的な日本の社会においては、先祖ってのは地域や共同体を作った先輩のこと
だから、自分の家のお祖父さんとかお祖母さんだけのことを指すのではない
社会を作った先輩たちが先祖なのだ
江戸時代になると、お寺が過去帳を作ったりする
そこで、若干、我が家の先祖感が生まれてくる
しかし、軸になっていたのは共同体の先祖

明治以降になると大きく変わり、我が家の先祖が先祖、という概念に
柳田国男もいっているが、先祖に固有名詞が付いたのは結構最近のこと
先祖というのは本来集合名詞なのだ
集合的なものとして、ご先祖様がある

日本の伝統的なお墓は、一人ひとつお墓を持つ
墓石はひとり一個ずつ
信長の墓はあるが、織田家の墓は無い
家康の墓はあるが徳川の墓は無い
墓とは個人のもの

明治以降になると家制度ができ、急速に変わる
そこで、先祖代々の墓が生まれた

だから、人々の先祖への祈りは決して自分たちの先祖だけへの祈りではない
社会の基盤を作った人々への祈り
先輩たちへの祈り
彼らと絶えず結びつきを持とうとするのが先祖供養

群馬の上野村とかだと、
旧盆のときに先祖の魂に戻ってきてもらい、最後の日にまた送る
その際は一か所に集まり、山に火をあげる

明治より前の日本では、神と仏は分けられていない
明治でしっかり分けられる

その際、日本の神社は半分くらいになったのだが、仏教はそれ以上攻撃された

それまでは、大きい神社であればお寺を持っているのが普通

その逆もまたしかり

諏訪大社に行ったとき、

野原になっていたもののお寺の跡があった

つまり諏訪大社の持っているお寺だ

これが明治にすっかり壊され、諏訪大社は神社だけになった

神や仏を分ける必要もなく、宗教でくくる必要もない

もっと、自分たちの生きる世界に根差した信仰ができていたはずだ

信仰するなら、信仰の場は必要になる

そこで、鎌倉時代頃から、自分たちでお堂を作る

そのお堂も、神をまつっているのか仏をまつっているのか明確ではない

まつた神や仏によって阿弥陀堂になったり観音堂になる

一方、それでありながら神の場所でもある、という感覚

お堂の中の仏は、観音、地蔵、阿弥陀が多い

群馬の村でも、念仏講などがあるが、念仏信者がいるわけではないということも

江戸中期には、農村社会の安定により豊かになった

その際に、家の中に祈りの場を作ることになり、仏壇が始まった

大金持ちだったら持仏堂を作った

庶民が仏壇を置いて仏を納め、祈っていく

また、田舎に行くと、仏壇の上に神棚がある

現在日本では、宗教教団は衰退気味

古い教団になると、檀家が減っている

また、幕末頃から発生する新興宗教も信者が減っている

かなりのところがピンチ

しかし、人々の信仰心は強くなっているのではない？

若い人たちでも自然信仰を持っている人が多い
ごく普通に観音や地蔵に祈る気持ちは衰退していない
自分の家の人が亡くなると、関係を保ちながら生きていこうとする
信仰はむしろ復活しているのでは？

信仰は復活し、教団は力を落としているのではないだろうか
それは何かというと、関係をもう一度作り直そうとする時代に来ている
自然との関係を持ちながら生きたいと思う人々に、自然信仰は魅力
亡くなった人と関係を持ちたい、神仏との関係を持ちたい、そういう考えは広がっている

つながるから死者の世界があるのだという考えを見直す必要があるだろう

弓削田先生

特に信仰を持っているわけではなく、いわゆる無宗教

大学生のときに哲学をやっていて、インド哲学の際に仏教に触れた
特に熱心ではなかったけれど

ここ7年くらいで、内山先生の関係で修験道の修行に参加させてもらった
1年に1回くらい

プチ修行で装束を着て、山に入った
自分たちの行った修験道は、出羽三山神社の、神社系の修験道
もともと、仏教系だったが明治以降に神道になった
白装束は、死者になって山に入るという意味

山に入ると、体感として、何によって生かされているかがわかる
それで、山から見た風景は貴重なものになった

修行後、語り合うと都会の人が多い

ちょっと疲れているんだろう

仕事をしている人でも、大手企業の人が多かった

元気を取り戻す一つとして修験道を選んだのだろう

緑って、理由なく元気をくれるし、フラットにしてくれる

人として普通の状態に戻してくれる

コロナの関係もあるのだろう、今山に行く人が多いらしい

ソロキャンプとか

単純に山に入るのも構わないのだが、それでは物足りない

自然との一体感がない

もっとディープにと思うと、修験道に手を出すのだろう

サラリーマンも多いので、自力でどうにかしなくてはと思う人が多いのだが、

自力だけではどうにもならない

フラットに元気になりたい人は、息も絶え絶え修験道に行く